

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

遠藤寛文

【所属】(助成決定時)

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻 博士課程

【研究題目】

初期アメリカ合衆国における「人民」の観念：ジェームズ・マディソン大統領期における共和主義・デモクラシー・世論

【研究の目的】(400字程度)

アメリカ合衆国が建国された 18 世紀末の時代、民衆は政治の主体とは見なされていなかった。しかし、19 世紀中葉にもなると、「人民」はアメリカ社会において絶対的な権威を伴うようになる。この変化はいかにして生じたのだろうか。この変化を理解する上で重要な転換期をなすのが、19 世紀初頭の 1812 年戦争期である。なぜなら、この時代にアメリカの政治家は、民衆世論の力の大きさを認識するようになったからである。1812 年戦争期の米国社会は、米国船舶からの船員徴募や旧北西部地方の急進派先住民に対する扇動活動など、イギリスによる陰謀をめぐる不安に覆われていた。この時期に台頭する新しい世代の政治家たち（その多くは主戦論を支持した）は、建国第一世代とは異なり、選挙や政治決定の場面で民衆世論を強く意識する行動をとることを躊躇しなかったのである。本研究の目的は、19 世紀初頭の新しい政治様式に対して、ジェームズ・マディソン大統領を始めとする指導層がいかなる態度を見せたのかという点を史学のおよび思想的に考察することにある。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は、アメリカにおけるデモクラシー(民主政治)の受容過程の萌芽を理解するに際して、とくに 1812 年戦争期におけるヴァージニア州の州内動向に注目した。その理由は以下の三点からなる。第一に、「オールド・ドミニオン」と呼ばれるヴァージニアは、英領北米植民地ジェームズタウン以来の長いイギリス植民地としての歴史を持っており、それだけにイギリスとの強い結びつきを残していたことが指摘できる。タバコ貿易はかつての繁栄はすでに過去のものとなっていたが、ヴァージニア農業はなお大西洋貿易と深く結びついていた。第二に、そのようなヴァージニアにおいてイギリス陰謀論が高まりを見せたことは検討に値しうる。東部に多くの良港を擁し、西部にアパラチア山脈を抱えるヴァージニア州では、船員徴募や先住民扇動に対する世論の関心度は相当高かった。第三に、1812 年戦争期を通して盤石な指導体制を確立させることになる、いわゆる「ヴァージニア王朝」の内的動向を把握することの重要性を指摘しうる。19 世紀最初の 25 年の間、大統領職はヴァージニア出身者(ジェファソン、マディソン、モンロー)によって占められた。この「ヴァージニア王朝」の崩壊こそが、1820 年代末に到来するジャクソニアン・デモクラシーの前史をなしていたのである。以上が、大農園主階層による名望家政治を特徴としたヴァージニア政治の変容過程を読み解くことが初期デモクラシーを理解する上で有益であると思われる所以である。

調査方法として、報告者は 2018 年 8 月 26 日から 9 月 5 日にかけて、メリーランド大学カレッジパーク校図書館および連邦議会図書館(ワシントン DC)にて資料調査を実施し、研究に必要となる一次史料および二次文献を収集した。これらの公文書館には、諸州諸都市の新聞がマイクロフィルムにて所蔵されているため、移動費を抑えることができた。さらに、関連する二次文献を購入し、研究動向の把握に努めた。

【結論・考察】（４００字程度）

研究を通して、相互に家系的繋がりを有する少数のエリートからなる植民地時代以来のヴァージニアの名望家政治が、1812年戦争期に生じた新しい時代の政治文化に多大な影響を受けて変容しつつあったことが明らかとなった。ヴァージニア政治の一つの特徴は、他州とは異なり、（一般的には民主政治の担い手と見なされる）リパブリカン派の側が東部大農園利益を代表する支配階層であり、（一般的にはエリート主義と解される）フェデラリスト派の側が貧しい西部民衆の声を代弁していたため、党派イメージが逆転している点にある。とりわけ、リッチモンドに拠点を置き、ヴァージニア州政治を指導するジェファソン派のリパブリカン派は、マディソンの大統領職継承（1808年選挙）をめぐって内部分裂を起こし、1820年代まで続く党内分派を形成していくことが明らかとなった。従来、マディソン本人は「指導力なき大統領」と見なされてきたが、それが個人的資質というよりも、州内情勢を含め、当時の社会不安によるところが大きいことが暫定的ながら史料および文献より推察しうる。

以上